

平成 26 年 5 月 28 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520398

研究課題名(和文)古フランス語散文「聖杯物語群」の研究

研究課題名(英文)Research on the Lancelot-Grail Cycle, French Arthurian Prose Romances

研究代表者

渡邊 浩司(Watanabe, Koji)

中央大学・経済学部・教授

研究者番号：20278401

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：13世紀前半に成立した古フランス語散文「聖杯物語群」を対象とした先行研究を総括し、新たな研究の方向性を示唆した。先行研究の総括では「聖杯物語群」の写本伝承、名称、作者、成立年代などに関する主要な論点を整理した。新たな研究の方向性としては神話学的分析を提案し、その具体例として「聖杯物語群」の中でも主として『メルラン続編』(別名『アーサー王の最初の武勲』)、『ランス口本伝』、『アーサー王の死』が収録する挿話群に注目した。

研究成果の概要(英文)：This is an overview of research on the Lancelot-Grail Cycle, vast prose romances written in Old French during the first half of the thirteenth century, of which the Lancelot Proper constitutes the central part. At first, I looked at several topics such as the manuscript tradition of the Cycle, its names, its authors and its possible dating. In a second part of this research, several episodes extracted from the romances that belong to the Cycle (especially Vulgate Merlin Continuation, the Lancelot Proper and The Death of King Arthur) are analyzed from a mythological point of view.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：仏文学 アーサー王物語 聖杯伝説

1. 研究開始当初の背景

12世紀後半に英仏フランス語圏で誕生した「アーサー王物語」は、以後3世紀にわたりヨーロッパで人気を博した。トマス・マロリーが15世紀に中世英語で著した『アーサー王の死』はその集大成であり、本邦ではマロリーの作品が「アーサー王物語」の標準形とされ、中世英文学研究者たちによる「マロリー学」の成果も、世界的に高い評価を受けてきた。これに対し、マロリーが創作にあたり典拠とした13世紀の古フランス語散文「聖杯物語群」は、本邦ではマロリーの作品と比較検討する作業が体系的に試みられたことはない。そればかりか「聖杯物語群」の研究自体も、中世フランス文学研究の分野では、相対的に小規模なままにとどまってきた。

2. 研究の目的

本邦では長い伝統を有する「マロリー学」が世界的な水準に達しているのに対し、マロリー作品の直接の典拠であった古フランス語散文「聖杯物語群」の研究が遅れている現状を踏まえ、本研究では以下の2つの課題を達成することを目的とした。

(1) 欧米の研究者たちが中心になって推進してきた、古フランス語散文「聖杯物語群」を対象とした先行研究の総括を行う。

(2) 従来の研究動向を踏まえたうえで、近年目覚ましい成果を挙げている神話学的アプローチを用いた「聖杯物語群」の分析を提案する。

3. 研究の方法

本研究の対象となった古フランス語散文「聖杯物語群」は、『アリマタヤのヨセフ』(または『聖杯由来の物語』)、『メルラン』とその『続編』、『ランス口本伝』、『聖杯の探索』、『アーサー王の死』という作品群からなる膨大な物語絵巻である。「物語群」を伝える写本は断片も含めれば160点以上に及ぶが、全体を伝える写本は8点にとどまる。そのうちの1つ、ボン大学図書館526番写本(筆写は1286年)を底本としたプレイヤッド版『聖杯の書』3巻本を、本研究では依拠すべき校訂本(原典)とした。

(1) 先行研究の総括にあたっては、「聖杯物語群」の写本伝承、「物語群」の名称、「物語群」を構成する各作品の作者や成立年代などを手がかりにし、先学たちの諸説を批判的に検討することにした。なお「聖杯物語群」の成立過程(サイクル化)の分析にあたっては、「物語群」の中で最初に成立したと思われる『ランス口本伝』と、最後に成立したと思われる『メルラン続編』が、「物語群」を構成する作品相互の関連を探る上で鍵になることが予想された。こうした見通しは、佐藤清編『フランス 経済・社会・文化の諸相』(中央大学出版部、2010年)所収の拙稿「古フランス語散文《アー

サー王物語》の《サイクル化》」の中ですでに提示されていた。

(2) 拙著『クレチアン・ド・トロワ研究序説』(中央大学出版部、2002年)で詳述したように、従来の「アーサー王物語」研究では、基礎的な手続きである写本伝承の確認や文献学的研究を別にすれば、修辞学や物語論に依拠した研究が優勢であったが、近年フィリップ・ヴァルテール氏(グルノーブル大学名誉教授)らが提唱する神話学的アプローチが、中世フランス文学研究を刷新しつつある。本研究ではこうした新しい方法論を「聖杯物語群」に対しても適用することにした。

4. 研究成果

(1) 「聖杯物語群」の成立をめぐる諸問題

これまで欧米を中心に進められてきた古フランス語散文「聖杯物語群」を扱った先行研究には多くの蓄積があるが、その大半が対象としたのは、「物語群」の中核をなす三部作(『ランス口本伝』、『聖杯の探索』、『アーサー王の死』)である。なかでも古典的研究とされるのは、フェルディナン・ロットの『散文ランス口』論、アレクサンドル・ミシャの『ランス口=聖杯』論、アルベール・ポフィレの『聖杯の探索』論、ジャン・フラピエの『アーサー王の死』論である。これらの著作を批判的に検討しつつ、一方で最近の研究動向にも留意しながら、「聖杯物語群」をめぐる主要な論点を整理した。

「聖杯物語群」の写本伝承

「聖杯物語群」を伝える写本の数は、断片も含めれば160点以上に及び、その所蔵箇所も多岐にわたる。しかしながら「物語群」全体を収録する写本は8点にとどまり、このうちロンドン・大英図書館追加10292~10294番写本は、20世紀初頭にオスカー・ゾンマーが刊行した校訂本の底本に選ばれている。これに対し、2001年から2009年にかけて刊行された『聖杯の書』全3巻(パリ・ガリマール出版)は、大英図書館の写本よりも筆写年代が約30年古い、ボン大学図書館526番写本を底本とした「聖杯物語群」の校訂本であり、本研究はこれに依拠している。以上の8写本とは別に、元来は同一の写本に収録されていたはずの「物語群」が分断されて現存するケースも2つあることが、近年の研究により判明している。

160点以上の写本の中には、「聖杯物語群」のうち少なくとも2編以上の物語を収録する写本が多い。収録する作品の組み合わせで特に数が多いのは、『ランス口本伝』+『聖杯の探索』+『アーサー王の死』(22写本)と、『アリマタヤのヨセフ』+『メルラン』とその『続編』(17写本)という2つのパターンである。写本伝承には依然と

して多くの謎が残されたままであるが、「聖杯物語群」が成立していく過程で、あるいは成立後も、2編か3編の作品が組み合わされた状態で読者＝聴衆に受容されていた可能性が高い。

「聖杯物語群」を収録する写本の中には、他のジャンルの作品を併せて収録するものは少ない。それだけに、こうした写本は筆写の依頼主や受容層についての貴重な証言であり、今後詳細な検討が求められるだろう。一方で、近年アリソン・ストーンズらが行った写本挿絵の研究成果によれば、レンヌ市立図書館 255 番写本やパークレー・バンクフロフト図書館 73 番写本の証言から、「聖杯物語群」のうち、『アリマタヤのヨセフ』+『メルラン』+『ランスロ本伝』冒頭という組み合わせと、『聖杯の探索』+『アーサー王の死』という組み合わせが、これら 2 写本が筆写されたと推定される 1220 年頃にはすでに出来上がっていたと考えられ、「サイクル化」がかなり早い段階で始まっていたことを窺わせる。

「聖杯物語群」の名称

『アリマタヤのヨセフ』に始まり、『アーサー王の死』で終わる一連の物語を、20 世紀初頭のゾンマーが「流布本（ウルガタ）物語群」と呼んだため、英米系の研究者たちは慣例でこの名称を用いている。フランス語圏ではこの名称と並んで、「ランスロ＝聖杯」、「散文ランスロ」、「ゴートイエ＝マップのサイクル」という名称も使われてきた。このうち「散文ランスロ」は「物語群」の中核をなし、最も古く成立したと思われる『ランスロ本伝』のみを指して使われることも多く、誤解を招く可能性が高い。また「ランスロ＝聖杯」という名称は通常、三部作（『ランスロ本伝』+『聖杯の探索』+『アーサー王の死』）の前に『アリマタヤのヨセフ』を加えたものを指すため、『メルラン』とその『続編』を除外しているように思われる。最近ではフィリップ・ヴァルテール氏が、こうした誤解を招く名称の使用を差し控え、「物語群」を「聖杯の書」と呼ぶことを推奨している。

「聖杯物語群」の作者

長大な「聖杯物語群」を構成する個々の作品の作者は不詳である。20 世紀初頭にフェルディナン＝ロットは「ランスロ＝聖杯」の作者一人説を唱えたが、これほど膨大な分量を単独の作者が書き記したと考えるのは難しい。これまで研究者の大方の賛同を得てきたのは、一人の設計者の企画のもとに複数の作者が個々の作品を書き上げたとする、ジャン・フラピエの説である。フラピエは物語群全体のプランナーを「建築家」と呼んだ。従来の見方では、「建築家」の構想を理解した個々の作者が、異なる時期に個別に創作を行ったと考えられてきたが、

最近では複数の作者が「立案者」（フラピエの言う「建築者」）とともに、ほぼ同時期に共同で創作を行ったという説も出されている。

「聖杯物語群」の成立年代

「聖杯物語群」の成立年代の推定は、「物語群」を構成する各作品がどのような順序で誕生したかという問題と絡み、議論は収束することがない。それでも『ランスロ本伝』が「物語群」中、最初期の作品であるという推定は、評者の意見の一致をみている。成立過程（サイクル化）について大方の賛同を得てきたジャン・フラピエの説によれば、最初に『ランスロ本伝』、『聖杯の探索』、『アーサー王の死』が順に成立して「三部作」が生まれ、ついで物語群の「玄関」にあたる『アリマタヤのヨセフ』が創作され、最後に両者をつなぐ『メルラン』とその『続編』が書かれたという（「物語群」全体の成立は 1235 年から 1240 年頃とされる）。これに対してフィリップ・ヴァルテールは、散文『メルラン』が『アーサー王の死』と同時期（1230 年頃）に成立し、その後散文『アリマタヤのヨセフ』が生まれて『メルラン』と組み合わせられ、最後に『メルラン続編』が、すでに出来上がっていた 2 つのブロックを繋ぎ合わせたと推定している。

このように「聖杯物語群」の成立過程は、『ランスロ本伝』に始まる「三部作」から始まるという見方がこれまで大勢を占めてきたが、近年ではジャン＝ポール・ボンソーが、『アリマタヤのヨセフ』（または『聖杯由来の物語』）の成立時期を従来の説よりも早い時期に設定している。このボンソー説を敷衍したのがキャロル・J・チェイスの最近の説であり、それによると、『ランスロ本伝』の最後の部分と、『アリマタヤのヨセフ』後半および『聖杯の探索』と『アーサー王の死』は並行して書かれたという。

一方で『メルラン』とその『続編』についても新たな見解が出されている。『メルラン』を収録する写本には、ロベール・ド・ボロンの韻文作品を散文化したものの（アルファ版）と、「聖杯物語群」に取り込まれたもの（ベータ版）という 2 系統があるが、この分類が『メルラン続編』の写本系統にもあてはまることが、リシャル・トラクスラーにより立証されたのである。ベータ版はアルファ版を改変したものであり、年代的にも新しいばかりか、創作意図を異にしている点にも留意しなければならない。ロベール・ド・ボロンの作品群では聖杯の冒険を完遂するのはペルスヴァルであるのに対し、「聖杯物語群」ではランスロの息子ガラアドだからである。

『メルラン続編』の 2 つの版（アルファ版とベータ版）には、分量の多寡といった物理的な相違のほか、重要な細部の改変

も認められる。その代表的な例は、『ランス口本伝』冒頭で、ランス口の従兄弟リヨネルとボオールの教育係として登場する騎士ファリアンの動向である。「物語群」中、『ランス口本伝』の直前にくる『メルラン続編』の大団円では、ランス口の父にあたるベノイック国のバン王が、隣国の敵クローダス王と干戈を交えるが、この戦争で騎士ファリアンはバン王側についている。このファリアンが『メルラン続編』のアルファ版によれば戦死し、ベータ版によれば生き延びるのである。作中人物のこうした対照的な扱い方は、2つの版の創作意図の違いを反映している。アルファ版はロベール・ド・ボロンの『メルラン』を完結させることを目的としているのに対し、ベータ版は「聖杯物語群」の一部となる選択肢を取ったのである。ファリアンが『ランス口本伝』冒頭で重要な役割を演じる以上、ベータ版の作者は彼を戦死させるわけにはいかなかったのである。

(2)「聖杯物語群」の神話学的読解の試み
本研究では先行研究の検討を踏まえ、新たな方向性として神話学的アプローチを採用し、「聖杯物語群」の中でも『メルラン続編』、『ランス口本伝』、『アーサー王の死』から複数の挿話を抽出し、具体的な分析を試みた。

『メルラン続編』

「聖杯物語群」の成立過程(サイクル化)の検討から、『メルラン続編』は「物語群」の構造上、前半(『アリマタヤのヨセフ』+『メルラン』)と後半(『ランス口本伝』+『聖杯の探索』+『アーサー王の死』)を繋ぐ位置にあり、なおかつ「物語群」中で最後に創作された部分としてその重要性が明らかになった。『メルラン続編』は、若きアーサー王が一連の武勇を見せる叙事的な物語であるため、ボン大学図書館526番写本ではいみじくも『アーサー王の最初の武勲』と呼ばれている。この作品には一方で、超自然的な要素が色濃い挿話群が散見されるが、アーサー王の武勲を語る本筋との関連が希薄であるとみなされ、これまで評者の関心を集めることはなかった。しかしながら、物語の創作過程にあって、口頭伝承が書承に劣らぬ重要な役割を果たしたことを明らかにしてくれるのは、まさしくこうした挿話群であり、本研究では以下の挿話群の神話的背景を明らかにした。

(a)グリザンドールの話

アーサー王の武勲を段階的かつ発展的に描く『メルラン続編』の中程に位置する「グリザンドールの話」は、魔術師メルランがアーサー王の許を一時的に離れ、ローマ皇帝ジュール・セザールの許へ赴く話である。この挿話では、臣下たちを女装させてふし

だらな生活を送っていた皇妃が火刑に処せられる一方で、男装してグリザンドールの名で皇帝に献身的に仕えていたアヴナール(ドイツ公の娘)が最後は皇帝の妻になる。この筋書きの中には、メルランが雄鹿に変身してローマ皇帝の前に姿を見せ、後にグリザンドールにより捕獲される場面が出てくる。こうしたメルランの変身には、雄鹿がケルト世界の新年にあたるサウイン祭(11月1日)に現れることで人間界と異界の一時的交流を可能にする季節的背景が認められるのみならず、1年の同じ時期にローマ皇妃が男娼たちに行かせていた仮装儀礼を告発する意味もあったと考えられる。近年ではジェンダー論の視点から、変装や仮装の側面だけが注目を集めてきたこの挿話が、こうした神話的背景を持っていることも見過ごしてはならない。

(b)アーサー王によるローザンヌ湖の怪猫退治

アーサー王の武勲として特に有名なのは、モン＝サン＝ミシエルの巨人退治であり、「アーサー王伝説」の歴史化に貢献したジェフリー・オヴ・モンマスの『ブリタニア列王史』(ラテン語、1138年頃)に早くも言及が見られる。この武勇譚は『メルラン続編』でも繰り返されているが、同じ『メルラン続編』には巨人退治に続いて、アーサー王によるローザンヌ湖の怪猫退治の挿話も認められる。物語の構造上では、アーサー王の武勇伝の二重化にすぎないこの挿話のルーツは、ケルト文化圏の伝承、なかでも中世ウェールズの「パリグの怪猫」(アングルシー島の災禍の1つ)まで遡ることができる。怪猫退治の舞台は、物語が述べるようにスイス西部のローザンヌ湖(レマン湖)ではなく、実際にはル・ブルジェ湖(フランス南東部のサヴォワ地方)であるが、この湖近くに張り出す山が「猫山」と呼ばれた伝承が、「島のケルト」起源の怪猫伝承と結びついて、『メルラン続編』の挿話を生み出したのである。

(c)エナダンとゴーヴァンの小人への変身

『メルラン続編』の結末近くには、エナダンとゴーヴァンという2人の騎士がそれぞれ小人に変身する挿話が認められる。エナダンは13歳の時、愛を拒んだ乙女から魔法をかけられ、醜い小人の姿にされていたが、22歳に魔法が解除される定めになっていた。その日はちょうど「三位一体の祝日」にあたり、森の中で出会ったゴーヴァンから挨拶を受けたエナダンが美男に戻ったのに対し、ゴーヴァンが醜い小人の姿になる。その直前にゴーヴァンは森で出会った乙女への挨拶を忘れ、最初に出会った人の姿になるという呪いをその乙女からかけられていたからである。ゴーヴァンは半年後に同じ乙女と再会し、魔法を解除しても

らう。2人の騎士がそれぞれ、妖精のごとき乙女により小人に変えられるモチーフは民間伝承からの借用であると考えられるが、『メルラン続編』の逸名作者はこのモチーフを核にした挿話をキリスト教の祝祭日という文脈の中に置くことで、宗教的な要素と世俗的な要素の融合を可能にしたのである。なぜなら、エナダンにかけられていた魔法が解除された「三位一体の祝日」は「聖霊降臨祭」の延長上にあり、ゴーファンの発した挨拶の「言葉」は「聖霊」のもたらす恩寵と関連づけることができるからである。

『ランス口本伝』の「苦しみの砦」挿話

「聖杯物語群」中、最も早く成立したとされ、「物語群」の中核をなす長大な『ランス口本伝』は、「アーサー王物語」の創始者クレチアン・ド・トロワが『荷車の騎士』（1177～81年頃）で描いたランス口の物語を大幅に展開したものである。クレチアンが「韻文」で描いたのは、ゴール国の王子メレアガンに拉致された王妃グニエールをランス口が解放するという1つの挿話的物語であるが、『ランス口本伝』の作者は、ランス口と王妃との不倫物語の前史として、ランス口の誕生から円卓騎士団の一員になるまでの長い筋書きを「散文」で著した。この2作品は、拉致された王妃の許へ向かうために、罪人を運ぶ小人のひく荷車にランス口が乗る件を共有しているが、この件に現れる「未来の墓」挿話は『ランス口本伝』では書き換えられ、クレチアンの『荷車の騎士』にはない「苦しみの砦」挿話の中へ組み込まれていく。

「苦しみの砦」挿話は、「湖の貴婦人」（ニニアヌ）による養育を経て、騎士になったばかりのランス口が経験する最初の通過儀礼を締めくくる冒険であり、複雑な構成をとっている。育ての親にあたる「湖の貴婦人」がランス口に抱く母性愛と、ランス口が王妃に抱く情熱恋愛が有利に働き、「苦しみの砦」にかけられていた魔法をランス口が解除するに至るこの挿話では、幽閉されていた人々を解放し、地獄下りを思わせる地下室での試練を潜り抜けたランス口が、救世主イエス・キリストのごとくに映る。しかしながら、この挿話にはキリスト教的解釈だけでは還元できない不可思議な要素が散見されるばかりか、読者＝聴衆は現実と超自然の間で宙づりの状態に置かれてしまう。「砦」の秘密を握る元城主がランス口の前から逃げ去ってしまったように、挿話自体の意味も読者＝聴衆から永遠に消え去っていくのである。

『アーサー王の死』の酒倉長リュカン
圧死の挿話
「聖杯物語群」の掉尾を飾る『アーサー

王の死』の大団円では、アーサー王の軍が王の甥モルドレ（モードレッド）の軍と壮絶な戦いを繰り広げた後、アーサー王と2人の臣下（ジルフレと酒倉長リュカン）のみが生き残るが、最後に礼拝堂でアーサー王が我知らずリュカンを抱きしめて圧死させるという不可解な場面が出てくる。15世紀に「アーサー王物語」を集大成したトマス・マロリーの版では、同じ人物は戦場に倒れていたアーサー王を抱きかかえようとして自らが倒れ、心臓が張り裂けるという形に改変されている。

中世フランス語版『アーサー王の死』でのリュカンの圧死については、心理的な解釈や運命論などが援用されてきたが、アーサーが今わの際に見せた動物的な所作を理解するには、彼がその名の通り「熊」戦士であることに思い至る必要がある（アーサーの古フランス語名 Artu(s)は、ケルト諸語では「熊」を指す）。姉妹モルガンの舟でアヴァロン島へ運ばれる前に、つまり現世を離れる直前にアーサーは、「熊」の粗暴性を取り戻したのである。その意味では、妖精の住む常若の国に他ならないアヴァロン島で、アーサーが怪我の回復を待つというのは、熊＝アーサーの冬眠の言い換えであると考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

渡邊浩司、13世紀における古フランス語散文「聖杯物語群」の成立、査読無、人文研紀要（中央大学人文科学研究所）73、2012、pp.35-59

渡邊浩司、『ランス口本伝』の「苦しみの砦」エピソードをめぐる考察、査読無、仏語仏文学研究（中央大学仏語仏文学研究会）45、2013、pp.1-33

渡邊浩司、現世を離れる直前に「熊」に戻ったアーサー王 中世フランス語散文『アーサー王の死』が描く酒倉長リュカンの圧死をめぐる、査読有、ユリイカ（青土社）45-12、2013、pp.177-188

渡邊浩司、アーサー王によるローザンヌ湖の怪猫退治とその神話的背景（『アーサー王の最初の武勲』787～794節）、査読無、仏語仏文学研究（中央大学仏語仏文学研究会）46、2014、pp.1-35

〔学会発表〕（計2件）

渡邊浩司、13世紀における古フランス語散文「聖杯物語群」の成立、チョーサー研究会、2012年7月21日、駒澤大学9号館174教場

研究者番号：

渡邊浩司、アーサー王によるローザンヌ湖の怪猫退治（『メルラン続編』）とその神話的背景、日本ケルト学会、2013年10月6日、女子美術大学杉並校舎7号館7201教室

〔図書〕（計4件）

渡邊浩司、他、中央大学出版部、英雄詩とは何か、2011、240 (209-236)

渡邊浩司、他、楽瑯書院、神話・象徴・図像 I、2011、752 (337-367)

渡邊浩司、他、楽瑯書院、神話・象徴・図像 III、2013、704 (83-112)

渡邊浩司、他、麻生出版、チヨーサーと中世を眺めて チヨーサー研究会 20周年記念論文集、2014、印刷中

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡邊 浩司 (WATANABE, Koji)
中央大学・経済学部・教授
研究者番号：20278401

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()